

資格検定 NEWS



朝日新聞の記事から

「敗者」の輝く言葉

五輪の舞台では、大多数は「敗者」として去る。だが敗者の弁は時に勝者より深みを帯びる。

▼陸上女子5000メートルに挑んだ米ダゴスティノ選手は交錯して一緒に転んだ他国選手を置き去りにしなかった。「立って立って。完走しなきゃ」。連れだって走り出したが、今度は自分が足の激痛で倒れこむ。助けた相手に助け起こされ、最下位でゴールした▼直後の抱擁が忘れがたい。「助けたのは本能。私が助けたというより私の中の神様が助けた感じ。一瞬のことだったけど、世界中で共鳴を呼ぶなんて。」

▼ウクライナ体操界の星ベルニャエフ選手。男子個人総合で内村航平選手に敗れた。小差で金を逃した「敗者」だが、会見では内村選手を助けた▼「あなたが審判に好かれているからこんな得点が」。採点の不正をにおわせる質問を内村選手が浴びた。隣のベルニャエフ選手はその厄介な問いに進んで答えた。「いったん得点が出ればそれは公平な結果。質問は無駄だと思う」。すがすがしい言葉だった。弊害が言われて久しい五輪だが、敗者の弁にまで世界の人々が耳を傾け、共鳴できる場はそうそうない。

寅さんは旅に出てこそ

▼「まずやりたいのは山田洋次監督の特集だ」、「『男はつらいよ』で?」。クロード・ルブランさんが諭す。「あのね、寅さんが日本人にしかわからないとか、その



心情がとても日本的だとか思うのは日本人だけだからね」

仏ロピニオン紙記者だ。その傍ら、月刊情報誌「ズーム・ジャポン」を出したり、日本映画の新旧の作品を上映する活動に取り組んだりしている。上映後に作品や日本を語る会を開いているが、ほとんどの人が帰らずに参加するという。仏中部の保養地ビシーで日本映画祭を定期的に開きたいと考えている。初回は山田監督のさまざまな作品に焦点を当てたい。日本映画は外国でも人気が高いのは知っているつもりだけれど……。「いやいや、日本文化への関心は、君たちが想像している以上なんだ」。

▼クリストフ・マルケさんは、フランスでまだ知られていない日本の文化を伝えたくて仏語で本を書いた。そしたら、日本でも知られていないから日本語でも出版しませんか、と提案された。

2人とも、もどかしそう。日本文化が十分に知られていないこと以上に、その価値を自分でまだよくわかっていないことに、それを自分で外に発信しようとしないうちに。最近の日本は日本ブームとでもいうべき様相を呈している。日本を強調するテレビ番組や書籍も目白押し。「だけど、それはみんな内向きの話でしょう」とルブランさん。日本人が日本人に向かって日本は素晴らしいと自画自賛、でも外に向けては、その文化を共有してもらうことに熱心には見えない、というわけだ。外の世界と出会おうとしないまま自画像に酔う——。葛飾柴又に閉じこもったままではフーテンの寅さんにならない。

朝日新聞 2016年8月21日

お盆

「お盆って、ご先祖様はお墓から家に帰ってくるんですから、お墓は留守ですよ。」と尋ねられました。お盆はご先祖様を家にお迎えしますからそういうことになります。昔の人は、留守のお墓は私たちがお守りしますから安心した家に帰ってきてくださいねという思いでお墓に参っていました。ですから、お盆のお墓参りには留守番という意味がありました。

家に誰もいないことを留まって守と書いて「留守」と言います。これは姿こそ見えませんが、家には留まって守ってくださるご先祖様がおられるということです。普段家を留守番して頂いているので、お盆は私たちがお墓を留守番しますということです。盂蘭盆（うらぼん）とは、自分勝手な行いはやがて自分に帰って来るという戒めの言葉です。温暖化などの環境の変化に苦しむ私たちは、まさに「盂蘭盆」の状態にあると言えます。命を繋いでくださったご先祖様に感謝し、自分勝手な行いを反省し、盂蘭盆にならない生き方を考える時。それがお盆です。

<平成28年8月10日
都 康雄 氏の文章から引用>

